

平成 21 年 6 月 10 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18730405

研究課題名（和文） 現代青年期の様相と自己意識の功罪について

研究課題名（英文） Pluses and minuses of being conscious on the self in adolescence of today.

研究代表者

中間 玲子（NAKAMA REIKO）

福島大学・人間発達文化学類・准教授

研究者番号：80343268

研究成果の概要：青年に対する批判として「自分らしさの追求とそれへの拘泥」が指摘されている。しかし、自分らしさの追求は青年期の自己形成過程に大きな貢献をすることも否めない。本研究ではこの点に注目し、これを“自己意識の功罪”と呼び、それが特に現代社会において注目される要因について、戦後の社会変動をふまえて明らかにすること、自己意識の“功罪”の分岐点について、特に日本におけるキャリア形成の問題を通して検討すること、に取り組んだ。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,300,000	0	1,300,000
2007年度	1,100,000	0	1,100,000
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
総計	3,700,000	390,000	4,090,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学（3902）

キーワード：青年期、自己意識、自己形成、キャリア、アイデンティティ、自己選択、社会変動、主体性

## 1. 研究開始当初の背景

青年心理学は、青年期を「子どもから大人への移行過程」ととらえ、その過程で生じる葛藤や問題の様相およびその克服過程の解明に力を注いできた。近年、社会構造が大きく変化したことに伴い、青年期をとらえる前提自体が崩れつつある。従来の議論の骨子を揺るがされた青年期研究は、今、まさに大きなパラダイム転換に直面している。

現代の青年や若者を理解する上で、昨今、最も精力的に研究を展開しているのは、心理学者ではなく社会学者である。青年心理学の

研究では、心理変数以外を考慮していないという点でその研究成果の価値を減じてしまっている研究も散見される。

しかしながら、心理的離乳やアイデンティティの確立など、従来の青年期概念との比較照合において、その変容の本質や意味の議論を深めるとい作業は、青年心理学分野にこそ求められるものとする。青年期として普遍的に指摘される現象と時代と共に変化してきた現象とを区別することで、現代の青年期の本質をとらえることができよう。

現代青年期とは何か、社会的変動をふまえ

で現代青年が生きる現実を明らかにすることと共に、そこで展開される現代青年期の様相を、発達の観点や自己形成的観点もふまえながら明らかにしていくことも青年理解においては必要な作業であると考え。

## 2. 研究の目的

(1)現代青年期の様相を、社会的・歴史的観点、発達の観点の2点から概観し、それを従来の青年心理学的概念との関係において再考し、現代における青年期の再定義を行うこと。論の骨子には、応募者が一貫して研究を行っている青年期の自己の問題を置くこととし、それぞれの時代を生きる上で、“自分探し”が心理的にどのような位置づけをもっていたのかを明らかにする。

(2)“自分探し”概念を検討するための概念的枠組みを明らかにする。

(3)「大人になる」ことについての意識の多様性を踏まえた現代青年期の様相、および、人生設計における青年の自己意識の様相について、欧州との比較もふまえながら、日本における現代の青年期の意味づけと今後の展望を導く。

## 3. 研究の方法

(1)文献研究である。

日本における自分探しについて、「公」と「私」の関係から検討する。

「自己」という概念それ自体が、近代思想に基づくものであることに注目し、日本人にとっての「自己」に伴うと考えられる、西洋にはみられない土着的心性について検討する。具体的には、「公」に対する「私」という位置づけから、独自の「私」という位置づけを獲得しようとする近代自我の模索過程、さらに、戦後社会における「公」の解体過程について概観する。

それらを通して、それぞれの時代において、青年達がどのように「自己」を心理的に獲得していったのか、戦後の「自分探し」の系譜を明らかにする。

青年の自己意識と生きた時代との関連の検討

特に、職業選択と家族の領域について焦点を当て、それらが生き方においてもつ意味が、時代と共にどのような変遷を辿ったのかを明らかにする。そのため、「現在、職業や家族の選択において、自己の状態は、いかに、どの程度関連するのか」という問いを具体的問題として設定し、それを時代的変遷の中で検討する。

(2)文献研究と調査研究である。

“自分探し”類型化の試み

先述した(1)の成果をふまえながら、21世紀における自分探しがどのような様相を呈しているのか、現代における自分探し論の概観を通して、その特徴を明らかにする。

さらに、現在さまざまな議論において用いられている“自己理解”“自分探し”“自己分析”の意味の多様性を、関連文献の内容分析から明らかにし、それらの多義性を分類・整理する自己意識の概念的枠組みを設定する。

“自分探し”類型の特徴の検討

で抽出された概念的枠組みに基づく心理尺度を作成し、それと生活感情や自己感情との関連を検討する。大学生を対象とした質問紙調査を行い、分析を行う。

青年にとっての“自分”の意味をとらえる方法の検討

青年期における自己がどのように形成されるのか、意識上においてどのように獲得されるのかについて、また、その過程をとらえるための方法論について検討する。中学生、大学生を対象とし、自己についての多面的測定を行い、結果を分析する。また、自己をめぐる問題の発生および変容について、自由記述の内容分析を行う。

(3)調査研究である。

“自分探し”とされる心性の多面性に注目し、どのような心性が「大人になる」ことに弊害となるのかを検討する。大学生を対象とした質問紙調査を行う。

キャリア形成における“選択過程”に焦点を当て、日本的自己観に焦点を当て、“選択”に対する抵抗を生じる要因について検討する。大学生を対象とした質問紙調査を行う。

## 4. 研究成果

(1)青年の自己意識の様相の変遷過程を明らかにした。

日本における自分探しとは何か

【得られた研究成果】近代社会への変遷過程および戦後市民社会形成過程の中で、非「公」あるいは反「公」という枠組みで「私」を獲得していく過程から、「公」とは独立した次元におかれる「個人」としての「私」となることを求められている事を明らかにした。さらに、現代社会において「私」を獲得することに伴う困難について、特に日本独自の文脈が付随する事を指摘した。

【成果の位置づけとインパクト】日本の土着的心性が看過されたまま、国際化に伴い自主自立が求められている。日本だからこそ伴う困難があることを指摘することで、今後の

議論を根本的に再考することができる。

青年の自己意識と生きた時代との関連の検討

【得られた研究成果】職業選択の変遷過程においては、社会や国家の政策が巧みに作用していること、それに呼応した形で職業価値が形成され、その価値に基づいた選択がなされることを指摘した。その上で、職業価値が多様化した現在、職業自体の価値基準がくずれ、その価値基準を決定する自己の状態が価値基準とされるといふ構造が形成されている事を指摘した。

また、家族の形成についても同様のことが生じており、典型的な家族像が喪失され、様々な選択肢が生まれた事によって、選択する自己の状態が価値化されるという事態が生じている事を指摘した。

それらを通して、現在、青年が直面する様々な“自由”は、時代と共に、その範囲のみならず、構造面でも変化していることを明らかにした。

【成果の位置づけとインパクト】自分探しをする青年が揶揄的に評論される一方で、それは社会変動の中で生じたものであるとする説も生じている。ここでの検討は、特に社会変動の中で現在の自分探しは必然的に導かれたものであることを指摘する点では従来の議論と同様の見解を示すものであるが、特に、世代間によって自分探しが生き方に及ぼす範囲が異なることを指摘したことによって、自分探し議論において常に存在する“ズレ”を、それぞれが過ごした時代における自分探し概念と関連づけて検討することができることを示唆するものである。

(2) “自分探し”概念を検討するための概念的枠組みを明らかにした。

“自分探し”類型化の試み

【得られた研究成果】現代においては、生きる上で「自分」を獲得している事が強迫的に求められている。しかしそれは容易ではない。そのため、人は常に何かを否定する形で「自分」を確認する事を指摘し、それが現在では、「今の私」を否定する形で「自分」を確認する現象が生じている事を指摘した。また、自分探しをめぐる多様な言説を3つのパターンに分類した。すなわち、自分が生きる喜びを見つけた体験としての自分探し、生き方が分からない者の模索過程としての自分探し、決められない若者が没頭する作業としての自分探しである。それらの議論に通底する心理的概念として、“自己違和感”と“自己開拓意識”を抽出し、自分探しの類型を規定する概念とした。

【成果の位置づけとインパクト】“自分探し”をめぐる議論には、常にその定義におけ

るズレが伴っている。しかしながらそれが対象化されたことはないまま、それぞれの“自分探し”について議論がなされていた。よって、自分探しをめぐるのは、常に肯定的見解と否定的見解とが存在していた。ここにおいて自分探しの言説を整理することによって、それぞれの議論の前提をふまえながら議論することの重要性を指摘する事ができた。

また、それらに共通する心性を抽出した事によって、今後、その観点から、様々な自分探しの例についての整理・分類が可能になると考えられる。

“自分探し”類型の特徴の検討

【得られた研究成果】自己違和感、自己開拓意識からなる自分探し尺度を作成した。確認的因子分析からの二次元性の確認、信頼性係数からの信頼性の確認、自尊感情、幸福感、アイデンティティ確立との関係からの基準関連妥当性の確認がなされた。また、両得点の高低の組み合わせによって4つの群を設け、それぞれの群の特徴を、自尊感情、幸福感、自己意識(私的自己意識、公的自己意識)および、自己観に関する項目(素朴な自己理論)から検討した。

その結果、LL群をのぞく3群はいずれも、何らかの“自分探し”をしている群であると考えられるが、その自分探しにどのような自己意識が伴っているかによって、その質は多様であることがとらえられた。HH群は、「1つに定めたくない」という意識がありながらも、「どこかにある本当の自分を探したい」を求める気持ちが、終わりなき自分探しを導いている群、HL群は、アイデンティティ拡散群として理解することが可能な群、LH群は、人の目を気にせず、自己に向き合うことを楽しんでおり、自己形成、自己実現を積極的に楽しんでいる群と捉えられた。なおLL群は、人から自分がどう見られるかという意識からは解放されており、自分にも満足しており、さらに、自己を1つに定めることも求めず流動的な、自己にこだわらない生き方を楽しんでいると考えられた。

【成果の位置づけとインパクト】同じように自己へと意識を向けていても、そこに自己違和感と自己開拓意識がそれぞれどのように伴うかによって自分探しのプロセスは異なる事が指摘された。特にここから、キャリア形成において肯定される自分探し、否定される自分探しの質を検討する事ができると考えられ、キャリア教育や自己理解教育における留意点が明確にされた。また、本研究の結果からは、人が自分探しに陥るサイクルも示唆され、今後の検討がさらに望まれるところである。

青年にとっての“自分”の意味をとらえる方法の検討

【得られた研究成果】青年期の自己の問題として指摘され続けてきた、自己像の混乱および自己価値の低下の問題を改めてとりあげ、新たな方法論の検討とそこでとらえられる視点について明らかにした。

まず、これまでの実証的アプローチについて、自我発達の基準からとらえる試み、文脈を捨象、自己への適応の程度をとらえる試み、自我の機能的側面から検討する試みに整理した上で、いずれにおいても、自己像への多元的アプローチが不十分である問題を提起した。

その上で、「自分で自分が分からなくなる」という主体意識の問題、「自分がいやになる」という客体的自己の問題、日常において自己が出来事に随伴して変動する程度の個人差の問題について、それぞれ質問紙調査を用いて検討した。その結果、冒頭にあげた自己の問題は、それぞれの側面、それぞれの意識レベルにおいて生じることが明らかにされた。ここから、自己の内容のみならず、枠組み、構造の質にも多様性を認めた上で、自己への多面的検討の必要性が示された。

しかしながら、そのような部分の組み合わせが全体を構成するわけではない。そこでさらに、個人の自己の問題がどのように発生し、どのように信仰していくのかを検討していくには全体的自己をとらえる別の方法論として Hemans による対話的自己論を用いた分析を行った。個人が抱えた自己の問題について、どの生成過程、変容過程が事例的に検討された。その結果、否定的様相をもたらすポジションが維持されていても、そこに別の声が付随することによって、全体としての構造が異なるという、これまでに得られなかった自己の変容プロセスが可視化された。ここから、自己の状況を対話構造としてとらえることによって、内面世界を過程に即して記述することができると考えられた。

【成果の位置づけとインパクト】対話的自己論は新しい自己理論であると同時に、特に、過程を記述する方法論としての有効性も有している。自己の問題の発生過程や変容過程をとらえる方法論として対話的自己論を応用することによって、表面的には同じ状態であってもその構造が変化していくことによって意味が異なってくるというプロセスをも検討していくことができるという指針を具体的に示す事ができたことで、自己研究の新しい方法論としての有用性を確認する事ができた。

(3)「大人になる」こと、特に、職業選択をめぐる意識から、現代青年期の様相について明らかにした。

「大人になる」過程において弊害となる“自分探し”についての検討

【得られた研究成果】自分探しに関する文献から、自分探し過程において展開される様々な心理的状态をとりあげ、そこから自分探し心性を分類する項目を作成した。大学生275名(男子88名、女子187名)を対象とした調査を行い、探求の方向性から「真の自己」「自己実現」「自己改革」「実存的解」の4因子からなる尺度が作成された。いずれも相互に正の相関関係にあった。

それらと、自己形成実践行動、活動関与不全傾向、選択回避行動、職業探索行動との関連を重回帰分析によって検討した。その結果、自己形成実践行動は、自己実現因子との間においてのみ有意な正の関係にあった。活動関与不全行動・選択回避行動は、真の自己、自己改革との間に有意な正の関係、自己実現との間に有意な負の関係を示した。職業探索行動は、自己実現、実存的解との間に有意な正の関係がみられた。

これより、自己実現を求める意識は、キャリア形成における正の行動を促進し負の行動を抑制すること、「真の自己」探しや「自己改革」探求は、負の行動を促進するが正の行動を抑制するわけではないこと、「実存的解」探求は特に職業選択を促進することが示唆された。また、4つの自分探し心性はいずれも相互に正の関連を示していた事から、負の行動を抑制する事よりも正の行動をいかに促進するかに焦点を当てる事が、自分探しの迷宮に陥っている青年への一助となると考えられた。

【成果の位置づけとインパクト】自分探しへの動機は抑制しようとする事で低減するものではない。しかしながら、その動機自体を否定する論考は少なくない。本研究は、その心性が、負の行動を促進する事はあっても正の行動を抑制する事はないことを指摘した。ここから、自分探しの状況を否定する必要はなく、どんな状況であれ、そこからの行動を展開する方向での働きかけが有効である可能性を指摘するものである。

自分探しの心性を批判したり抑制したりする議論は、負の行動を抑制する意味しか持たず、むしろ、思考を抑制する事はかえって思考を促進する事になる。それゆえ、キャリア形成などにおいて自分探しを禁ずる方向性は、むしろそれへの拘泥という弊害をもたらすのではないかと考えられた。

キャリア形成における“選択過程”に焦点を当て、日本的自己観との関連から、特に、「主体であること」をめぐる自己意識が重要である事を明らかにした。

【得られた研究成果】日本におけるキャリア形成の論議において「一個人として社会に

において自己実現を推進できるような主体の確立」が求められている。しかしながら、日本における教育観や道徳観などを考慮すると、キャリア形成において求められる自己と、それまでの人生、生活において求められてきた自己とが、齟齬を来している可能性が指摘される。そこで、日本における自己形成のあり方を文化的自己論の枠組みから改めて検討した。そこから、「決める」ことよりも「決める主体である事」に抵抗があるのではないかという仮説が導かれた。これに基づき、自己決定できる主体であることに適応できない心性、自己の欲求に基づく「自己実現」プロセスの不全について調査を行った。

女子大学生 154 名に対する調査において、「誰かに人生を決めて欲しい vs 自分で人生を決めたい」「あらかじめ生き方が決まっている方がいい vs 自由に生き方を決めたい」の項目についての回答を求めたところ、目立って前者に得点が偏るという結果は得られなかった。これより、選択が多いという社会状況自体に抵抗や不満があるというわけではないと考えられた。ただし、この回答に対して、自尊感情、信頼できる関係の所有、個別性の認識、内的統制感、自己不明瞭感を説明変数とした重回帰分析を行ったところ、自尊感情 (.237,  $p < .001$ )、内的統制感 (.230,  $p < .001$ ) のみが有意な正のパスを示していた。つまり、自尊感情や内的統制感が低いと、誰かに決めてもらいたいという意識が高まる事が明らかにされた。個別性や自己不明瞭感には有意な関連を示さなかった。ここから、個人主義的自己意識の欠如よりも、主体性の感覚が育っていないことが問題かもしれないと考えられた。

【成果の位置づけとインパクト】現代は、多くの選択を迫られる時代である。その中で「決められなさ」が問題となっている。しかし、選択それ自体が負担となっているわけではなく、また、個別性が育っていないことが問題でもなく、選択する主体であることが負担となっているのではないかと考えられた。これより、自分探しが問題とされる現代青年期ではあるが、それは、自己についての認識を深めたり個別性を育てたりという、自分探しへの回答を得る事によってではなく、自己に対する価値感情や統制感によって、解決されていくのではないかと考えられた。これより、自分探しに対する処方箋の描き方への再考が必要となると思われる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

中間玲子、“自分探し”類型化の試みとそれぞれの特徴について---“自己違和感”と“自己開拓意識”の枠組みからの検討---、福島大学研究年報、4、2008、7-16頁、査読有(但し学内)

中間玲子、小塩真司、自尊感情の変動性における日常の出来事と自己の問題、福島大学研究年報、3、2007、1-10頁、査読有(但し学内)

水間玲子、大学教育の議論における大学生研究の意義と視点---心理学研究の知見から---、福島大学総合教育研究センター紀要、1、2006、97-106頁、査読無。

〔学会発表〕(計6件)

Nakama, R., The structure of problems with career development caused by conflicts among multiple voices, The Fifth International Conference on the Dialogical Self, 2008年8月26日、イギリス、ケンブリッジ大学。

中間玲子、自己探求的心性と自己意識および感情との関連、日本心理学会第71回大会、2007年9月18日、東洋大学白山キャンパス。

中間玲子、“真の自己”観念の所有とキャリア形成との関係---女子学生を対象として---、日本教育心理学会第49回総会、2007年9月15日、文教大学越谷キャンパス。

Nakama, R., A study on the self-exploration during adolescence: Does ‘self-exploration’ harm maturation of adolescents in Japanese society?, 13th European Conference on Developmental Psychology, 2007年8月23日、フリードリヒ・シラー大学(ドイツ、イェナ)。

水間玲子、自分探しの様相について(2)---人生において重視される自己の諸側面の検討から---、日本教育心理学会第48回総会、2006年9月16日、岡山コンベンションセンター。

Mizuma, R., Whose voice is saying "who am I?": The changing process of the self during adolescence. (in Symposium designed by Mizokami, S., What in the dialogical self involves Japanese psychologists?), Fourth International Conference on the Dialogical Self, 2006年6月3日、ミンホ大学(ポルトガル、ブ

ラガ)

[図書](計2件)

小塩真司・中間玲子、『あなたとわたしはどう違う?---パーソナリティ心理学入門講義---』ナカニシヤ出版、全208ページ、pp.85-166、pp.182-191、2007年。

中間玲子、青年期の発達---自己の形成  
藤田哲也(編)『絶対役立つ教育心理学---実践の理論、理論を实践---』ミネルヴァ書房、全225ページ、pp.183-200、2007年。

[その他](計2件)

中間玲子、現代青年期の様相と自己意識の功罪について、平成18-20年度日本学術振興会科学研究費補助金(若手研究(B)、課題番号18730405)研究成果報告書、全134頁、2009年、未公刊。

中間玲子、メディア情報との関連にみる現代青年の自己意識の様相、平成18-20年度日本学術振興会科学研究費補助金(若手研究(B)、課題番号18730405、題目『現代青年期の様相と自己意識の功罪について』)研究成果報告書補助資料、全133頁、2009年、未公刊。

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

中間 玲子 (NAKAMA REIKO)

福島大学・人間発達文化学類・准教授

研究者番号：80343268